

皆さん、こんにちは、石川です。今日はお招きいただき、ありがとうございました。私が鑑賞教育にかかわるようになったのは、80年代後半からでしょうか。

午前中は、長田先生から美術・芸術の制度にかかわる問題、さらに美術館の制度やマネジメントにかかわる問題を包括的にご発言いただきましたので、その流れから午後は、美術館のなかで、教育普及にかかわる話になります。

私の勤め先は教員養成の学部・大学院で、その面から学校にかかわることが多く、そのなかから見ると美術館は、学校の利用する中心施設にはどうしてもなっていません。例えば、小学校では社会科見学などの折に博物館に行くことはあります。なかに図工に熱心な先生がいらっしゃって時間をうまく確保できると、美術館がコースに入ってくるかなというぐらいです。学校では美術館の位置は広範なカリキュラムのなかのほんの一部、あいまいで基盤の弱い立場にあることを実感しています。

また、現実そのものが、芸術は21世紀ではどうなっていくのか、例えば、社会的あるいは科学的に評価の定まったものをきちんと伝えることが教育の一つの側面だとすると、それが定まらないと学校でどう扱っていいかわからないという問題が生じます。私は、その間(はざま)に紛れ込み、大変なところに来てしまったなと感じておりますが。

ところで、美術館と博物館は日本社会では独立し、学校でも別のものととらえられていますが、私はあえてこの中で「美術・博物館教育」と表記しています。これは平たく「ミュージアムmuseum」といえば済むことですが、カタカナでミュージアム・エデュケーション、あるいはアー

ト・エデュケーションは、まだしっかりと落ちてこないところがあり、敢えていいにくい表現をいたしますが、そんな思いがあります。

タイトルの「art概念の拡がり」と鑑賞は、先ほどの流れのように芸術あるいは美術、アートがどんどん拡がる中、それに対して鑑賞はどうするのかという、私の今日の基本的テーマです。それだけでは納得いただけないかとサブタイトルを付けましたが、これは、ややうさん臭さも感じています。量的展開と質的保障、この保障という言葉に抵抗を感じられる方もおいでかと思えますし、質とは何をもって質かという問題もあります。現れ来たる鑑賞の諸問題を活動の量的側面だけでなく内容面、質からも多面的に見ていこうという意味合いを持たせました。

シンポジウムのここまでは、主に美術館に身を置かれる方にとって切実な問題が語られてきましたが、それと学校をつなぐ部分、私は教員養成の場にありますので、その意味で私のお話のはむしろ教員をどう変えていくか、あるいはどういう方向で我々がお手伝いできるかということが中心になります。

1. 鑑賞教育における量と質の問題 (問題の所在)

その意味で、最初に提示した量の問題は、例えば家庭にお父さんがいて娯楽というと、パチンコやって屋台で一杯、あるいは、ゴルフやってプレジャー・ボートで釣りに行くけれども、なかなか美術館に行く方は多くない。先生方の調査でも、美術館に行った経験のある子どもは、まだまだ少ない状況です。これは、環境の要因が大

きく、お父さん、お母さんたちにしても小学校、中学校の図工・美術を経験して社会人になっているわけです。ですから、昨日の齋さん(パネラー)の「来ない人は来ないのだ」とはその通りで、大人にこれ以上期待するよりは、これから育ちゆく子どもたちをどうするか、20年、30年見ていったらどうかということが私たちの仕事として大事だと思いますし、現職の先生たちに対しても働きかける意味があるかと考えています。その意味で、量的な保障をしていくには学校という場は重要だと思います。

問題は、水準、こういう言葉は使いたくないのですが、です。どうなることがいいのか、処方方には私には未だありませんが、量的な普及の過程で、どういう活動が子どもの中に展開されたら、それは今後の発展に期待できるのか、そうした活動の質を問題にしてほしい、そういう意味です。

確かに当事者、当事者とは学校と美術館の両者ですが、としてできること、あるいはそこでないといけないことは何か。これは、今までの発表にたびたび出ていてご了解済みかと思いますが、相手の大切さあるいは弱点や事情といったものを互いに理解した上で棲み分けていく、そういう意味での連携、相互理解は必要ではないかと考えています。

2. 美術館・博物館教育と鑑賞教育

最初に話しました美術館教育と博物館教育は、ミュージアム・エデュケーションと言ってしまえばそれでもう済むことです。それと鑑賞教育の問題について少し考えてみます。

「art概念の拡がり」と鑑賞 —鑑賞教育の量的展開と質的保障—

石川 誠 (京都教育大学教授)

(1) 美術館教育と鑑賞教育

博物館には自然科学系の動物園や水族館もみな博物館ということも了解の上で、博物館、美術館、その中の教育普及が一方であります。もう一方、学校で鑑賞教育と言うときには、小学校では図画工作、中学校・高校では美術と、表現と鑑賞の双方から成る教科カリキュラムを無視するわけにはいかないわけです。すると、カリキュラムですから当然、その中には目標や指導内容があり、評価という問題が付いてきます。こうしたことを前提に考えると、両者が目指すところは、美術館は社会教育の、学校は学校教育の一環となるわけですが、別組織だから全く別の問題というわけではなく、長期的に見たら美術館は当然生涯教育にかかわるけれども、学校も生涯教育を目指すべきではないかと考えます。

というのは、例えば中学校3年間に何か一生懸命つくっていても、うまくくれる子はいいいですが、大方の子がうまくいかなくて苦痛を味わい、ああやっと美術が終わったという状況では、後の人生において美術は遠く存在です。よって、学校の美術教育は、学校を出てからいかにつき合えるかというスタンス、あるいは基盤づくりを目指したい、というのが私の今日の結論です。教員の方にもう少し生涯教育を意図した内容でカリキュラムを考えていきませんか、ということです。

(2) 美術の享受と理解の間(はざま)で

もう一つは、いわゆる楽しむことと理解することです。先ほど昼食の折に、フランスの文部省で美術史や美学の内容が小学校にも入るよう検討されているという話が出ていました。日

本の戦後教育を見ると、教育が系統主義に向かった時代、それから終戦直後と特にこの20年余り、人の生き方を幅広く総合的・体験的に学ぶ経験主義的方向に傾いた時代と、戦後の冷戦構造の中で振れてきた経緯がありますが、美術教育で特徴的なのは、「美術を学ぶ」のか、あるいは美術を通して人間形成をしていく「美術で学ぶ」のかということが問われてきました。これは美術教育の論争にもなっていますが、私が受けてきた時代、戦後十何年かの教育で、美術鑑賞は中学の美術でありました。それは、美術史の内容を先生がスライドで写して、これはキュビズムの何とかでこういうところがいい、分かったね?と期末にペーパーでテストされる。理解といっても、これは暗記と言ったほうが早い、そういうものでした。だから、その後美術にかかわる、あるいは美術に親しみを持って卒業していく人がどれだけいたか、疑問が残ります。

そして、この20年余りかけて、楽しさを追求する、遊びなども含む子どもの興味・関心を大事にしようという流れです。その傾向が強くなり、気付いた頃に学力低下の問題が出てきますが、その流れの中で、体験を通して分かる、そこから人間形成するということが問われてきました。そのときに、私がこの仕事にかかわっていて感じることは、美術館サイドの方の教育に対する基本的な不信感といえますが、程度の差はもちろんあります、そういうものが何かあるような気がします。60年ほど前、ハーバート・リードというイギリスの詩人が著作の冒頭に、辛辣な批評で知られる劇作家バーナード・ショーの言葉を引用しています。「美術のみが苦痛を与えずに教育する唯一の教師だ。」教育には苦痛を与えるというイメージ定着しているようで

す。特に、体罰が過去にはあったという事情もあります。ショーもリードも、美術に教育の可能性を見ているようです。文学者や芸術に携わる人、いわゆる自由な魂を持つ人々にとって、どうも教育はうさん臭いというイメージや不信感がある気がしてなりません。この辺をもう少し相互に理解していくことが必要だという気がします。

3. 「美術」概念の広がりや鑑賞

タイトルにあるように、美術概念がこのように広がってきたときに、「美術」というのは狭い、古臭い、教条主義的などというように余り良いイメージがないためか、もう少し広い芸術、最近よく片仮名でアートと書かれることが多くなりました。アートになると非常に広いことができ、何でも可能なイメージで使われることがあります。そういう意味でこういった分野、美術・芸術・アート、アーティストにかかわる概念がどんどん広がりをを見せている状況があります。その際に、では学校でどう扱っていくかがやはり重要になると思いますが、今のこうした芸術概念に、特に金沢21世紀美術館さんは開館以来、教育普及でも刺激的な発信をされていて、私たちの学生も好きな美術館の一つとして、よく通ってきます。

美術・芸術・アート概念の広がりや美術教育に関しては、先ほどのリードの著作『エデュケーション・スルー・アート(Education through Art)』^{*1}をタイトルにつけたInSEAという美術による教育の国際学会という団体があり、世界規模で定期的に開催されます。一昨年の8月に大阪で世界大会が、日本で約50年ぶりに開催されました^{*2}。

*1. 邦訳：『芸術による教育』、フィルムアート社、2001年

*2. 第32回InSEA世界大会2008 in 大阪、2008年8月5日-8月9日。
『教育美術』no. 798 (2008年12月)で特集。

私は、鑑賞教育・美術館教育のセッションを二つ担当し、シンポジウムとセミナーをここに書かれた方々をお招きして行いました。

そのシンポジウムの席で、それぞれのとらえるアート概念が国柄あるいは歴史的背景によって大分違うということが分かりました。画面の一番手前の方は、マイケル・パーソンズさんです。それから林曼麗さん、故宮博物院の前館長さんです。マリー・フルコヴァさんは、プラハのカレル大学の美術教育の研究者ですが、彼女も現代美術館と一緒に研究している方です。向こうの方が河本信治さん、京都国立近代美術館の学芸課長さんです。それぞれの考え方に大変幅があるということが分かりました。

面白かったのは、もう一つのセッションです。先ほどでいいますと、セミナーの一條(彰子)さん(東京国立近代美術館)と、不動(美里)さん、平林(恵)さん、こちらの館の方です。谷口(幹也)さんと相田(隆司)さんは大学の研究者です。不動さんと平林さんが当館における「明後日朝顔プロジェクト21」という日比野克彦さんのプロジェクトを報告された際に、質問が出ました。美術館の建物の周りにロープが張っており、朝顔の種を巻いて、そこに朝顔が育っていくという活動をアートとして提案したときに、「あれがどうしてアートなのか」という絵にかいたような質問で、セッションとしては大変盛り上がりました。確かに学校教育での扱いに困る印象はあるかも知れませんが、現代の状況としてアート・シーンにある以上は、やはり子どもたちもそういうものが同時代にあることを知る、あるいは自分たちの肌で触れることは、学校で扱う必要があると思うのです。分からないとか形がないからと葬るのではなく、そういうものと

どう触れるかということは、何か体験させたいと思っています。

4. 見る側と見せる側

次の問題は、見る側と見せる側、今まででいう鑑賞者とそれを提供する側、美術館になると思いますが、こうした両者の立場から鑑賞活動を考えてみたいと思います。

(1) 鑑賞活動の設計

今までの形態を見ますと、美術館に特定の展覧会コンセプトがあり、それに基づいて特別展や常設展示が行われるわけですが、それをもし学校の子どもたちに出会わせるとすると、学校に熱心な先生がおいででないと困難です。いらっしゃるところは何とかこれが子どもたちまで届きますが、そうでないと、なかなか実現しない。あとは、子どもたちの家庭にそういうマインドがある親御さんがいて、子どもたちを連れて美術館に行けばそこで成立しますが、ごく少数のようです。

先ほどの量的保障から考えると、やはり学校の先生の存在が大事ですが、現実はその人たちがピンポイント的に美術館を訪ね、教育担当の学芸員の方と「子どもを連れてきたいのですが」と相談しながら、ほそぼそと成り立ってきたのがこれまでです。なかに研究者がかかわることがあって、大規模な企画展、特別展などの際に鑑賞活動を研究として組織した事例はこれまでも発表されていますが、大体美術館のコンセプトに基づいたものでした。その場合、子どもはどうかというと、用意された計画にこういう

一つの論理があり、子どもにこのように届けたいという構造の中で鑑賞していたわけですから。

私たちが、もう少し見る側の論理、子どもの中からもっとこんなものが見たいとか、同じ作品でも違うかわり方ができないかなどと考えると、別途に何か考える必要があります。現在考えているのが美術館にある多数の企画のうちの一部をもっと子ども側に移すという取り組みです。初めから、教員と学芸員が何か子どもに合った展示を考えられないか、探ろうとしました。そこに研究者がお手伝いしてもいいのですが、大事なのは教員と学芸員です。実際、すべての学校でこうした計画を実施できないにしても、私たちが提示しようとするのは、今までの関係構造だけではなく、先生たちももう少し子どもを考えて作品が選べますよ、という新しい関係構造を提示できたらいいと考えています。

この図の展覧会コンセプトは研究レベルで考えた一つの企画展ですが、ここは場合によっては、3~4点の、その館のコレクションをどう取り上げ構成して、子どもたちを巻き込んだ展開ができるか両方で考える、というふうを考えればよいと思います。この後、事例をいくつか紹介しながら、ご覧いただきます。

(2) 鑑賞教育プロジェクトによる事例

これまで幾つか試みたうち、近年の3つほどを紹介すると、一番が「美術を身近なものにするために」プロジェクト(2004-06年)。当時、科研でやってきたプロジェクトがそういうタイトルでしたのでそのまま挙げました^{*3}。ここで私たちが重視するのは、その美術館のコレクションです。特別展というのは、非常にいい展覧会でパッと総括的に見られますが、後でまた見た

*3. 「鑑賞教育研究プロジェクト」(代表者：石川誠)による
日本学術振興会平成15-17年度科学研究費補助金(基盤研究C)
研究プロジェクト(課題番号：15530585)

いと思ってもなかなか見られません。やはり、その美術館のコレクションを子どもがどう受けとめていくかが大切だと思いますので、立派なコレクションが揃っているところに協力してもらいました。岡山の大原美術館と東京国立近代美術館、それと地元の京都国立近代美術館の3館をベースにして、それと近隣地域の学校とで協力してプロジェクトを組み実施したものです。

2番目の「鑑賞教育の可能性を広げる」は進行中のもので、金沢21世紀美術館さんと、京都地区は前から協力いただいている京都国立近代美術館、それから作品のいわゆるジャンル、そういう幅をもう少し広げたいという思いがあり、京都の総合博物館、京都国立博物館さんに協力してもらっています⁴。ここでは、今回「書」が登場します。書は一般に美術教育のジャンルではなく書道教育になりますが、ビジュアル・アートとしては変わらないのではないかと、それも取り込んでいます。それから、写真やいろいろなものがかかわってきます。金沢さんは沢山の方がかかわっていらっしゃいます。

それから、3番目が先ほどのカレル大学のマリ・フルコヴァさんと数年前、プラハのギャラリー・ルドルフ・ヌム現代美術センターをベースに実施した共同研究プロジェクトがあります。そこで行われた日本の写真家、東松照明の特別展「SHOMEI TOMATSU: Skin of the Nation」、これはサンフランシスコ近代美術館が企画し、恐らくその巡回展としてプラハで開催したものだと思いますが、その学校向けの鑑賞を一緒に考えましょうということがかかわったものです。

「美術を身近なものにするために」プロジェクトでは、最終的に冊子をつくりました⁵。これ

は言ってみればエデュケーターズ・ガイドです。『美術を身近なものにするために』というタイトルで、3館の協力者の方のお薦めの作品が各館で5点だったと思います。大原美術館さんは(クロード・)モネの『睡蓮』、京都国立近代美術館は(ピエト・)モンドリアンですが、このほかに写真作品があります。ここで扱っているように、モダンアート、いわゆる近代美術にかかわるテーマで、まずこのプロジェクトをつくりました。冊子の最初のページには作品図版とキャプションがあり、ここには制作の背景など解説的なものが載せてあります。これは、学校で先生方が使われるときの教材研究の資料となります。それから、子どもたちに投げかける言葉ですが、鑑賞活動を組むときに、問いかけるキーになる言葉が載せてあります。作品は自由に見ていいというのが一般的な考え方ですが、ただ、この作品のこれだけは押さえておきたい、ということも挙げてつくった発問例です。これも大体同じ状況でつくってあります。図版はできるだけ精度の高い画像を用意して、学校での教育利用にコピーを許可してもらうことで載せてあります。イメージに取り込みプロジェクターで投影するなど、複製による鑑賞になります。

子どもたちは、教室でこうして先に鑑賞し、授業では一応鑑賞の活動を終えますが、教室の30人なり40人なりのうち何人かが、後で「お父さん、美術館に行ってみようよ」とか、あるいは、友達同士で休みに行こうかと、全員などとは考えませんが、そういう子どもが少しずつ出てきたら、という願いがあります。それを積み上げていったら、可能性が開けてくるので、こうした環境を子どもの周りにつくっておきたいという思いがあります。活動展開の方向や内容につ

いては、まだまだ吟味する必要があります。

後のページに出てくる展開の一つの例として、「形と色から」というテーマで、東京国立近代美術館とお茶の水女子大学附属中学校とが共同で行われた鑑賞実践があります。特徴は、中学校の美術科カリキュラムに「形と色」というテーマがあり、それと関連づけて鑑賞するプログラムという点にあります。ただ、これにはやや危険が伴います。「形と色」で出会った作品だからその面しか見えない、では困るので、当然それなりの一別の視点も尊重され、先入観を与えないといった配慮は必要となります。いづれにしても、これは鑑賞を学校の中に確実に取り込む一つの工夫と言えます。

次は、「わたしの、ぼくのモンドリアン」というテーマの小学校の例です。モンドリアンの水平線、垂直線から成る作品を見て、子どもはパソコンの作業で作画体験をします。そうした経験を経て再度モンドリアンの作品を見ると、自分たちはパソコンでさっさと描いたけれど、どうもモンドリアンは手で描いたらしい、といったことを意見交換しながら、どう作品を見ていくかといった活動を提案していました。

以上が一番目のプロジェクトです。これらは、鑑賞教育の改善のために学校現場の先生や美術館の学芸員さんが地域の美術館のモダンアート、近代美術にかかわるコレクションをどう活用するかというテーマの実践でした。

(3) 教員養成における事例 1

次は、私がかかわる教員養成における事例です。学生の何割かは将来教員になりますので、現場に出て子どもとどうかかわれるか、美術と子どもとの接点をどう見つけるかというマ

*4. 「鑑賞教育研究プロジェクト」(代表者: 石川誠)による日本学術振興会平成20-22年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究プロジェクト「美術・博物館の知的財産活用による生涯学習を見通した鑑賞学習システムの構築」(課題番号: 20530818)。京都国立近代美術館、京都国立博物館、金沢21世紀美術館の各館学芸員、京都・金沢の各地域の小・中学校および書に関して高等学校の教員による3つのワーキング・グループを編成し、各館のコレクションに基づいた小・中学生の鑑賞学習モデルを、実践試行を通して開発した。金沢21世紀美術館の収集作品からは、トーチカ《PIKA PIKA Project in Kanazawa》、および、マイケル・リン《市民ギャラリー 2004.10.9-2005.3.21》に基づいた鑑賞学習モデルを開発した。このうち、前者については、本書pp. xx-xx所収の黒澤浩美、木村健による事例発表を参照。また、本研究については、同研究の研究成果報告書(鑑賞教育研究プロジェクト発行、2011年)、および、石川誠、竹内晋平編『2010美術科教育学会地区研究会(フォーラムin京都)「美術鑑賞の問題: みる・つくる、そして状況」発表梗概集』、鑑賞教育研究プロジェクト発行、2010年、を参照のこと。

*5. 鑑賞教育研究プロジェクト編『美術を身近なものにするために: 鑑賞実践ガイド』、鑑賞教育研究プロジェクト発行、2006年

インドは学生時代に培っておく責任がありますので、実施している内容です。

これは、学部の授業科目「美術鑑賞教育」で開講する演習の後半部の取り組みです。学生がキュレーターや教員になったつもりで、先ほどの「鑑賞活動の設計」を作品・作者を特定して、具体的に構想しようという事例です。

初めに課題として、特定の作品や関連する作者、あるいは美術運動や主張、考え方など、そうしたものと子どもとの出会いをどのように設定できるか、を提示します。当然、作品研究が必要となりますから、それを文献や図版等でいろいろ研究調査します。そうした作品などの素材選定と並行して、もう一方で、活動対象である子どもを小・中・高校生と、ある程度設定します。

それから、素材を対象年齢に合わせてどう構成するかプランニングをしますが、途中で対象年齢を変更することもあります。その後、実際の制作に取り掛かります。プレゼンテーションの多くは、パネルや冊子、立体物の形態を取っています。その後、私どもの狭いギャラリーですが、そこに展示して発表会、批評会を行うという流れになります。少しその作品を紹介します。

幾つかの年度のものが入っていますが、これは水槽のようなものをプラスチックで作り、中に絵が入っています。伊藤若冲という江戸時代の観察の優れた画家です。魚の描写で、普通生きた魚は上からしか見えないものを、若冲が横腹を描いたのは、江戸時代にガラスというものが入り水槽ができたからだ、という調査を基に構成したもので、この箱は畳んでプラスチックのケースに収まるようになっていました。この学生は、作品研究のなかから、子どもに見せて興味を引きながら、個別内容の理解というよりは、若冲がそんなことも考えていたのかといっ

た姿勢を子どもに伝えようとしているようです。

これは田中一村の水墨画をテーマにしています。奄美大島に住み、原色を多く使います。色をまず抜いてみて、一色ずつ加えながら色彩を意識させ、作品構成を考えさせようとした力作です。画像を個別に切り抜き、マーカーで着色して貼っています。

それから、これは日本の幽霊、怖いものを描いた絵という。円山応挙や葛飾北斎などに登場する幽霊のこういうイメージを集めて、それをおどろおどろしく薄汚れさせた布切れに取り付け、木の枝に掛けてあります。それをキャッキヤと楽しみながら展示して仲間と見ていました。多分、応挙や北斎を見たであろう、その幽霊の包括的なイメージを自分なりにここで表現しています。こういうマインドを持って先生になってくれたら、きっと子どもたちに出合わせるときに、何か今までと違ったものが出てくるのではないかと、そう感じさせる例です。

これは、ゴッホのあの「夜のカフェテラス」です。最近テレビのコマーシャルで吉永小百合さんが出ていた、あれはおもしろいと思うんですが、他にもスーラやセザンヌ版があったりして、オリジナル作品を知る人があれを見ると、にやりとするわけです。文化ベースの違いはありますが、そういうものが楽しめるような人に育ってほしいと思います。建物は画面に基づいて厚紙で立体的につくっています。人物やテーブルは紙粘土で作り、背景を加えて何か舞台のセット、ステージアートみたいに構成しています。

右側の写真はブリューゲルの、森洋子さんなどいろいろな方の研究がありますが、それらを調べて、まず左側の冊子でいろんな問いかけをし、その対応を見ていくものがあったり、右側は同じブリューゲルの他の作品をと、セットに

つくった力作です。

何度もおことわりしていますが、これらは既に研究された成果です。それでも、これをつくるために学生は調査し学んでいます。学びの精神は、教員になっても大切なことではないでしょうか。美術の時間が足りないから鑑賞まで手が回らないとか、多くの小学校の先生は、美術史が分からないから鑑賞は教えられないとおっしゃいます。しかし、教材として扱うには教材研究はみな行うわけです。理科や算数、社会でも、授業の前には教材研究はされるわけですから、こういう美術も教材研究は必要ではないかと思います。本課題は、学生にそういう習慣をつける効果もあると考えています。

こちらは、アルチンボルドの春、夏、秋、冬の作品、これをパズルみたいにピースにばらばらにし、ここに野菜や果物があるわけです。ピースをばらして、もう一回組んでみる、過去にもこうした事例はありますが、それを自分で経験してみようという、真摯な取り組みです。

次のクリムトは、よく登場する学生が好きな作家ですが、クリムトの絢爛豪華さを、立方体の箱の3面に鏡を張り万華鏡のような効果で表わそうとしている。そんなものをつくった学生がいます。

こちらは、カンディンスキーです。カンディンスキーの画面の各要素を、アルミの針金や色セロハンなどを使って立体化して、パズルのように自分で楽しめる遊具をつくっています。これで遊ぶこと自体がアートかどうかはともかくとして、これをつくる学生は相当学習していると思います。

その後、順次自作の前で、この作品のどういふところに重点を置いたかといったことを発表したり質問したりしました。

(4) 教員養成における事例 2

これは教員養成のもう一つの事例で、大学院の課題研究で行ったものです。京都国立近代美術館にギャラリー・ラボという実験工房的な企画展示があり、その一環で私たちに場を提供していただいたものです。2008年7月から9月まで、6週間の会期でした。私の研究室の院生、院生OBの教員、それに学部の学生2名が加わっています。京近美のコレクションで、貸し出し予定のある作品以外は何の作品を使ってもよい、という贅沢な環境を与えていただきました。

自分たちで展覧会をつくるという構想の実現のチャンスです。タイトルは「〈書く〉ことと〈描く〉ことの間—京近美コレクションと子どもたちの出会い—」展です。基本的なコンセプトは、例えば絵でもフランク・クラインなどのアクション・ペインティングと、いわゆる前衛書家が箒のようなものでバン、バン、バンと床に広げて書くものを見ると、何か似たようなことをやっているのでは、と思うことがあります。「書く」と「描く」には違いがあるのか、これが展覧会のテーマですが、そのプロジェクトを少し紹介します。

これは、美術館での最初の打ち合わせで、2月下旬だったと思います。どんなものになりそうかと、そこから始めました。

ここでは、まだ全体の話し合いがまとまっていません。コレクションの分厚いカタログを何冊も借り、大学の演習室で、その中から自分の取り組みたい作品をまず取り出してみようと、作業しています。まず必要なものを挙げ、そこから仕分け作業になり、出したもので構成できるかどうか吟味します。その際、学生たちの頭の中には、一方で子どもがあり、どういうふうに見せるか、どのような活動が可能か考えながら進めています。まだ海の物とも山の物とも

つかない状況で、いろいろ作品が挙がってきます。視覚だ、聴覚だと、ホワイト・ボード上で進行錯誤しているところです。

そうこうして3カ月余り、開催日の近くなり、ようやく展示構成案がまとまりました。4階の企画展示室の中央に可動の仕切り壁を置き、一方を第1室、反対側を第2室にして、1室は問題提起、井上有一さんという前衛書家の作品です。何かフランク・クラインに似た、アクション・ペインティングを彷彿させる書です。一応読めそうな漢字を1点と全く読めないアンフォルメルな書作品を並べて、その隣に具体の白髪一雄さんの足で描く作品です。「書く」と「描く」ことの意味を問う、そうした作品が並ぶコーナーです。

そうした表現の展開が第2室に続いていく。モンドリアンと具体の菅野聖子さんの線による表現があり、次が磯辺行久さんの《舞楽図屏風》で、これまで全部平面でしたが、ここからが立体に。さらに3次元に発展していくところで終わる、そんな構成に何とか行き着きました。

それで、実際に展示設営です。開催日の前日、専門業者さんが収蔵庫から搬出し、私たちは作品に触れることなく、学芸員の方と指示しながらそれを展示しています。そういう場に立ち会えた、貴重な機会でした。立派な展示室入口の表示、ポールをつくっていただいて、何かその気になってきました。

この場面は、最初ここに元永定正さんと吉原治良さんの具体の作品を並べるつもりが、壁面の余白スペースが狭いという問題が発生し、対応を協議するところです。計算上は収まるはずだったのですが、実際に置いてみると、どうも窮屈だと。事前に美術館の方から、置いてみないと分からないと助言を受けてはいまし

たが、その場面になり、さあ困ったということです。隣の壁にもう一つ大きな元永さんの作品があり、この壁面が広いので、それと入れ替えて解決しましたが、そんなことがありました。

これは、磯辺行久さんの《舞楽図》の展示作業で、全部ふたが開きます。効果を見ながら、どこを開けるかのこだわりと、オリジナル作品に触らせてもらう貴重な機会を感じながら、白い手袋をはめて展示しています。そして、最終的な照明のチェックを業者の方が行い、ほぼ展示が終わるところです。

第1室は、井上有一さんで、こちらは日本画で照明が落としてあります。第2室は、こういう並びになりました。ちょうどInSEA大会の最中で、外国の方が多数来館ということで、英文の解説表示パネルも用意していただきました。

これは、子ども向けに何らかの投げかけがあった方がいいと、コーナー7か所に置いた案内ボードです。邪魔にならない程度、といってもかなり大きいですが。このパネルは、最初の壁面で書家の井上有一さんが活動している場面です。これは、最後の磯辺行久さんのもので、同じ舞楽の俵屋宗達のオリジナル版が載せてあります。磯辺行久さんは、もう一つこの人物をこの辺に描いています。オリジナルとインスパイアされた、そんな関係も考える、そのように構成しています。

その後、これはメンバーのOB教員が、附属小学校の2年生の子どもたちを夏休み前に会場に連れてきました。いわゆるギャラリー・トーク前に10数分時間を設け、子どもたちが思い思いに見て回りました。自分の身長より大きな作品の前で、友達と何かいろいろ話して見ている、そんな体験です。

こちらは、京都に勤め先の学校がある現職の

院生で、9月に学年で鑑賞活動を行いました。4年生全クラス、160人をどのように鑑賞させるか、この院生を中心に相談して、館内の会場を4パートに分けました。こちらの磯辺作品と向こう側の元永作品のところに各1パート、手前向きはモンドリアンと菅野作品のパートです。反対側の壁面に白髪作品のパートがあります。5分程度と時間を決め、その間にそれぞれのパートでギャラリー・トークのような活動をしようと。時間で次のパートに移動という流れで、量的な要請のある鑑賞を、ある程度の水準を維持しながらいかに可能にするかの試みでした。通常の学校の団体鑑賞は、入り口で「さわるなよ」「走るなよ」と抑えて、「さあ」と送り込み、ざっと15分程度で出てくる場合が多いようですが、そうしないで、どのようなことが可能かということです。

ご紹介するのは以上です。結論として、私たちがかわれる部分は、今変わりゆくこうしたアート・芸術状況を前に、それぞれの特性や方針を持つ美術・博物館と学校とが、いかにかかわれるか、その対応を学芸員や教員の方々がされる手助けにあると考えています。最初申しました、いわゆる生涯学習を目指すことが学校としても求められるのではないかと思います。

授業時数は限られ、学習指導要領という法的基準もありますが、現場の先生方には作品研究や幅広いものに触れる経験が必要だと思います。鑑賞教育には、まず、指導者がこうした対象を好きになり、美術館にも足を運ばれることです。ここには、学校の先生方でその志向の強い方がおいでになっていますが、こういう場やに来られなかった方も美術館にお誘いして、新しい鑑賞の可能性を拡げる力になっていたいただけとありがたいです。

駆け足で申しわけありません。どうもありがとうございました。



石川 誠(いしかわ まこと) | 京都教育大学教育学部教授

1973年、東京学芸大学大学院教育学研究科修了。美術教育(鑑賞教育論)。美術・博物館の知的財産を活用し、生涯を見通した鑑賞教育の構築を目指す。2003-05年(財)大原美術館・京都国立近代美術館・東京国立近代美術館と地域の学校による鑑賞実践プログラム『美術を身近なものにするために』。2006年 カレル大学(プラハ)と共同でルドルフィヌム・ギャラリー特別展Shomei Tomatsu- Skin of the Nationの鑑賞プログラム開発。2007年、同大学招聘講義。2008年、32nd InSEA世界大会2008(大阪)の企画「鑑賞教育と美術館教育」のシンポジウムとセミナーをコーディネート。著書『講座現代の教育15新しい感性の育成』(雄山閣)ほか、論文に「美術鑑賞における鑑賞者の論理とは」『京都国立近代美術館研究論集CROSS SECTIONS』2、「ニューヨーク近代美術館のティーチャーズ・ガイド・美術館が提供する教師支援プログラムにみる学校とのかかわり」『美術教育学』26ほか。